

# 地域計画の策定における風土の意義

— 鴨川沿岸海岸づくり会議を事例として —

嘉瀬井 恵子

KASEI Keiko

## はじめに

従来、公共事業に関しては、事業主である行政や専門家によって議論がなされ、一般の市民には、議論の場への参加が十分でないのが現実であった。このような中、ユルゲン・ハーバーマスらをはじめとした、対話から生まれる意味構成の重要性が注目されるようになる（ハーバーマス 1985、1986、1987 他）。日本においても公共事業のアカウントビリティ向上の必要性が指摘されるようになってきた。1990 年代になると、政策課題においては、行政や専門家だけでなく、市民とともに議論する方向へと転換した。ここには画一的ではない、地域独自の計画へ向かうべきことが根底にあると言える。

では市民参加によって地域独自の計画を策定することとは、いったい、どのような合意形成プロセスをたどればよいのか。たとえば議論の場では、今までの科学的専門性に依拠した決定方法ではなく、地域特性や文化、歴史を活かすべきことについては、往々にして指摘されている。その一方で、利害関係者や専門家を前に市民が自分の意見を述べることは難しい現状がある。なぜなら市民の意見は、専門家の知見と対等に扱われることが少ないからである<sup>(1)</sup>。

本稿では、市民参加によって海岸事業を決定した、千葉県鴨川市の「鴨川沿岸海岸づくり会議」（以下、「海岸づくり会議」と略記する）を事例にプロセスとしての合意形成の実践的考察を試みたい。

## 1. 合意形成の困難性 — 科学・技術・社会の関係 —

高度経済成長期以降、公共事業をめぐる議論の場は、法制度や経済的な論点に組み込まれ、事業主である行政や専門家で占められていた。近年、市民参加の取り組みが実践されるようになってからも、その多くが、開発か保護・保全か、あるいは経済優先か環境優先かに収斂されている。しかも多様な主体での話し合いの場を持つこと自体が目的化した会議では、たとえ合意に至ったとしても、正統性は自明ではない。結局は市民の頭越しに政治的、科学的知見ばかりが議論されるのである。

これらの反省から、科学・技術・社会を互いに翻訳して同一の土俵で解釈していくことにより、科学技術の悪用、善用等の二分法の域を超えていく「STS (Science, Technology&Society) 相互作用モデル」(松本 1998 : 4) の幕も開きつつある。専門家の意見に同化、集約させるのではなく、地域知、経験知といった市民の知による意思決定の有効性も明らかにされている(高橋 2000 他)。ただし「市民参加」の「市民」は、行政の仕組みや法律上の解釈、技術面など知らない部分が多いのが普通である。仮に合意に至ったとしても、その合意が予算制度や執行手続き、あるいは現場の技術的な部分が考慮されていなかった場合、後に「合意通りにいかない」というところに陥ることになる<sup>(2)</sup>。

では科学・技術・社会が連携し、理に適う合意をするには、どうしたらよいのか。これらの関係を、以下では構造的問題としてではなく、地域にすむ人々の実践的な問題として捉えていきたい。

## 2. 言説空間における風土の視点

市民の生活世界の視点には、科学の持つ客体対象には還元できないなにがしかの論理がある。それが風土である。哲学者、和辻哲郎の風土論には、まさしくこのような論点が見出される。和辻は、「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」(和辻 1979 : 9) を風土と捉え、自然環境と主体としての人間を切り離していない。「風土の現象を文芸、美術、宗教、風習等、あらゆる人間生活の表現のうちに見い出すことができる」(和辻 1979 : 17) と論じ、風土を「人間の自己了解の仕方(下線は筆者)」ととらえている。つまり、景観や風習等の自然環境、自然現象といった人間だけの生活ではないところに、私たちは「生」を了解しているのである。言うなれば、風土は、身体そのものなのである。

同様にオギュスタン・ベルクも「風土」とは「ある社会の、空間と自然とに対する関係」と規定し、「現れる」ものだ指摘する(ベルク 1994 : 111-115)。つまり風土とは理解するものではないし、自然科学の対象としての自然環境でもない。人間生活の中に蓄積されてきた「日常直接の事実としての風土」(和辻 1979 : 10)なのである。したがって地域の文化や歴史といった地域特性よりも、風土は広い概念であると言える。その意味で、地域の計画策定づくりにとって風土の共有、継続の視点は不可欠な要素と言ってよい。

## 3. 風土の焦点とその性質

風土は、亀山純生によって「風土感覚」と「風土性」に分けられる。まず、風土感覚とは「地域の住民がもつ自己の属する感受性(センス)」であり、風土性とは「歴史的に形成されてきた風土の方向性、風土の変容の可能性と範囲」としている(亀山 2005 : 165)。

したがって風土感覚を持ち、風土性を見いだすことは、地域のあり様の基礎となる。その際の焦点として、ここでは「風景」、「生活様式」、人々のシンボルとでも言うべき「象徴」、そして「歴史的変容性」の4つの性質について確認する。

### (1) 風景

風景とは、桑子敏雄によれば「身体の配置への全感覚的に出現する履歴空間の相貌（下線は筆者）」（桑子 1999：50）である。たとえば山や里、海だけではなく、心の奥に深く刻まれた記憶に対しても、日常では、原風景と呼んでいる。ここでは、桑子の定義に込められた意味を読み解きたい。重要な鍵となるのは、「身体の配置」である。「身体の配置」とは、「ひとりひとりの人間がこの地球上のある地点に空間的な広がりをもって配置されていることである。その配置を決定しているのは、身体がこの空間で他の人間や事物、空、大気、水、大地、とどのような全体的な関係にあるかということ、また地球上のさまざまな事物とどのような関係のものにあるかということ」（桑子 1999：108）である。人間をとりまく複数の要素との配置の問題だけでなく、この配置のもとで、「世界を知覚し、記憶し、行動の基礎とする」（桑子 1999：108）ことを、「身体の配置」という表現は含んでいる。この配置無くして、身を以って為す知である経験知は芽生えない。それゆえに風景とは、外観を写真で切り取ったような一元的なものではあり得ない。

さらに「履歴空間」は、桑子が「空間の履歴」と規定する概念であり、「空間の歴史性」（桑子 1999：21）を表している。では、その空間の有り様とは、どうあるべきか。

日本は古来より山や海や川、干潟など、多くの恩恵を受けていた。しかし近代以降、豊かであった自然は、経済的に重要なものと、そうでないものに分けられた。海域は役割の少ない場所と捉えられ、埋立てられ、宅地や工場に姿を変えた。諫早湾では干潟の「賢明な利用」の概念のもと、干拓事業が実施され、湾の悪化や漁業に多大な影響を与えた。このように空間が持っていた漁業文化を評価する意識は低くなり、地域の履歴の重みは末梢されるのである。海辺がレクリエーション、リバーフロント、ウォーターフロント、インナーハーバーのような互換可能な等質空間となった場合には「空間の履歴」はない。それ以前の「空間の履歴」を考慮せずに海岸が計画されると、履歴は造成の時点で断絶してしまうのである。

イーファー・トゥアンは、「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつきのこと」を「トポフィリア」（トゥアン 1992：20）と名付けた。これは「われわれの心を動かすとき、場所や環境は、感情に満ちた出来事を担ったり、あるいは象徴として知覚される」（トゥアン 1992：160）ものである。ふるさとの風景が心から離れないといったような場所に対する親近性や愛着は、人がその地域に対する関係性から芽生えた結びつきの心情である。この点で地域社会全体として風景は存在する。風土とは、トポフィリアのような場所に織り込まれた「空間の履歴」の厚みと言って良い。

### (2) 生活様式

人々は農業や漁業などの生業、伝統、そしてさまざまな文化に接している。また地域の秩序や習わしの意味を共有している。地域にとって風土とは「共有された意味」

である。先祖から伝わる掟や習わしに対して自己を自省的に振り返る態度も、人間を取り巻く自然や生活様式との感応の上に成立する態度であり、風土と言える。つまり人は明確に意識をしない中で、実は自分の行為や意識を風土として自覚し、その都度、判断しているのである。

だから人々が何ら伝統や文化と関わりを持たず、単に孤立した「アトム化した個人」でしかない場合、風土の文脈とは程遠いということになる。

日常的な暮らしの中で山岳の美や、海辺の波音を愉しむことも、自然風物に人生を重ねるという意味では、身体的関わりとしての風土の視角と言える。

### (3) 象徴

現代の合理的な暮らしの中で、地域の人々が海や山、巨木や農作物に対し、神の存在を認めることや、畏敬の感を抱く事は少なくなった。しかしながら、かつては明示的に、道徳的に神聖な生物や場所はあった。次章で扱う鴨川沿岸では、ウミガメとその墓である「亀塚」がそれである。『鴨川市史』には、漁師がウミガメを「リュウジンサマ」と呼び、龍神様のお使いとして大切に扱っていた記録が残っている（鴨川市編さん委員会編 1991：948）。

### (4) 歴史的変容性

ギデンズは近代の特質である再帰的近代化について、自らの思考と行為を反照し合う状況におかれていると強調する。つまり、自分の行っている行為や認識について反省的に認識できること。またそれにもとづいて行為や認識が修正されることこそ現代であると説く（ギデンズ；1993）。しかしこの場合の難しさは、反省的に問うべき基盤はすでに変化していることである。公共事業や地域開発が計画されれば風景や生活様式も変わり、象徴の意味も忘れられていく。たとえば、今見ている海辺は、生き物が豊かだった頃の海辺の風景ではない。現在の規範で考え出した風景である。

風土は永遠に持続するものではなく、周囲との関わりにより変化している。その点で風土は変容の性質を持つ。現在、地域開発によって自然の摂理が壊れつつあるが、発見的に風土の感性を読み取らなければならない。それにも関わらず、現代の基準を用いて、画一化した環境行政や公共事業を進めている。

以上見てきたように、自然の風景や生活様式、象徴などとの連関の中で、我々のエートスは風土の感性となって育まれていくのである。ここにおいて風土は、地域住民の規範と深い関わりを持つ。

そこで以下では、地域における合意形成プロセスにおいて風土の共有が大きな意義を持った具体例をみていきたい。

## 4. 海岸づくり会議

1999年に改正された海岸法では、旧海岸法の目的である「海岸の防護」に、新たに「海岸環境の整備と保全」及び「公衆の海岸の適正な利用の確保」の2つの目的を加え

た。しかし、法制度という外形的仕組みが変わっても、それまで「防護」のみに徹してきた海岸を、「防護」「環境」「利用」の3つの目的が調和するような海岸にするのは容易ではない。「環境」「利用」に関しては、まさに多様な価値観が存在するからである。

2003 年 11 月、鴨川市の鴨川沿岸（前原海岸・東条海岸）における追加の改修工事をするにあたり、「きれいで安全で利用しやすい海岸」を目指し、海を利用する全ての人が意見を言える場として「海岸づくり会議」が開催された。鴨川市が主催・事務局を担い、6 回にわたり開催され、その会議の記録・資料は全て鴨川市役所のホームページで公開された<sup>(3)</sup>。工学の専門家が 2 名参加したが、助言に徹し、中心に議論したのは漁業者、サーファーや一般の市民である。

### (1) 鴨川沿岸の概要

千葉県鴨川市は古来より漁業に支えられてきた。鴨川漁港は第三種漁港で、利用範囲が全国的であり、他県の船も水揚げをしている。

また、日本のサーフィン発祥の地とも言われる東条海岸沿いは、1970 年代からホテルや旅館、レジャー施設が立ち並び、多くの海水浴客が訪れる観光地でもある。1980 年代に入ると、リゾート開発の一環として海岸の南端に位置する鴨川漁港と加茂川をはさむ形で新たな観光資源が模索された。1987 年に制定された通称リゾート法の流れを受け、フィッシャリーナ<sup>(4)</sup>を造成することを本来の目的とした新漁港の造成工事が行われた。漁業者の一部やサーファーからは、工事によって、海岸の地形の変化や生態系への影響を危惧する声が上がる中、長引く経済不況も影響し、海岸に突出した形のフィッシャリーナが完成したのは、1990 年代後半に入ってからである。危惧された通り 2001 年度に開業したフィッシャリーナによって、海岸の地形は大きく変化していった。その結果、近年、漁業基盤である漁獲高も目に見えて減ってきている。

### (2) 「海岸づくり会議」の概要

2003 年 11 月、第 1 回会議が開催された。地域住民や漁業者、サーファー、地元の観光業者など 90 名近くが参加した。主催者である鴨川市から会議の背景が説明された後、鴨川沿岸の課題が専門家から言及された。特に河口近辺の土砂の堆積、前原海岸離岸堤<sup>(5)</sup>や鴨川漁港防波堤の建設による東条海岸の浸食<sup>(6)</sup>についての現況は深刻だった。説明によれば侵食対策として取られている構造物の設置は、護岸や堤防等の構造物に作用する波力を減殺させる機能がある一方、これにより本来動的に動くはずの砂の流れを著しく劣らせている。また、既に設置された離岸堤によって砂は減り、生態系の生活基盤は失われつつある状態という。

参加者の意見交換で最初に専門家が参加者に対して強調したのが「過去の履歴を明らかにする」(第 1 回会議での発話。以下「第 1 回会議」と略記する)ことである。その上で「よい意味の折り合い付け」(第 1 回会議、下線は筆者)をしたいと述べた。その際、自分たちの生まれる以前の鴨川の写真から、当時の暮らしを振り返ることに時間を割いた。漁業者からは、海難防止の神、大漁の神の教えが紹介された。また、古老の漁業者からは「網をみんなここへ持ってきて、干したのですよ、この砂浜で。」(第 1 回会議)といった記憶が語られ、当時の浜幅と現在との違いを確認した。



第2回会議では、3名の市民からそれぞれ鴨川の植物、漁業、サーフィンの現状が基調講演として語られた。通常、会議の基調講演は学識を有する専門家が行う場合が多い。しかしこの会議では、あくまでも市民が議論の場の中心であったことは留意すべきであろう。基調講演をした市民の、「(散歩道に)もっともっといっぱい花が咲けばいいのに」(第2回会議)との語りは、海岸沿いの侵食によって、花の成育に必要な砂幅ではなくなってしまった現実を物語っている。海岸に咲く花は、生活的自然であり、単なる観賞用の自然ではない。何気ない発話の中から、気づきの重要性が見出されていったのである。

また漁業者は、新たに造成した鴨川漁港内の波が高く、船揚場に船を係留することができないと訴えた。ただし高波の対応に有効な方法として、今ある防波堤を延伸する策もあるが、その場合、今度は別のエリアで浸食を拡大させ、越波を継続させることになる。よって、一概に防波堤を延伸することもできない。漁業者は、「レジャーも大切ですけれども、私たちの方の船の引き上げも非常に大切だと思っています」(第2回会議)と苦しい胸のうちを吐露した。

さらにサーファーは、日本全国の中でも貴重なサーフィン文化を持つ鴨川から世界に羽ばたく選手を出すためにも、場所の重要性を訴えた。

第3回会議ではウミガメの墓である「亀塚」の場所や、かつて漁で使った網を干した記憶から、元々の海岸線の位置を確認した。産卵に訪れるウミガメにとっては、波浪の影響を受けにくい安定した砂の位置が必要となる。豊かな浜幅は植物の生育やウミガメの産卵のためだけでなく、大きな被害をもたらす越波対策として防災上からも意味がある。

そして防災の観点で具体的な話が進展したのは、第3回会議の後半からである。鴨川漁港の対策として波除堤の検討と、今後の計画を議論した。続く第4回会議では、サーファーから、沿岸についての「短期、長期の対策」の提案があった。参加者が事業を優先すべきエリアを共有したことにより、議論は飛躍的に前進した。

第5回会議では、越波被害については陸上から対策を取る方法を本格的に検討した。この検討では、市民からは景色、風景についての発話が多く述べられた。仮に改修する護岸の高さが、遠景とのバランスを失うような空間となってしまった場合、かけがえのない海岸の眺めを失うのである。特に近隣の病院の患者も海岸を利用するだけに、市民からの「車いすの方だとほとんどもう海岸が見えないよという状況になってしまう」(第5回会議)との指摘は、専門家をして「全然僕は気がつかなかった」(第5回会議)点であった。

### (3) 議論の帰結

3年3ヶ月にわたって議論を続け、2007年2月、最終の第6回会議を迎えた。越波対策の実施方法については合意が得難い場面もあったものの、以下の合意が得られた。まず、東条海岸の越波対策として護岸を嵩上げし、緩傾斜護岸改良とすること。鴨川漁港は静穏度を考慮し、除波堤に変更すること。護岸には100～200m毎に海浜にアクセスできる階段工を設置すること——等である。総体的に見れば、海岸中央部の観光施設側を中心に緊急性を持たせた内容である。これらの合意が工事主体となる千葉県の方針

に反映されたことは大きな成果ではあるが、しかしながら、この変更により砂浜の侵食が即時にとまるわけではない。将来にむけた具体的な方向性については、漁業文化の象徴である「弁天島」を今後、参拝しやすくするような土地活用をしていくこととなった。

## 5. 考 察

### (1) 合意における風土の射程

この会議で繰り返し、埋立て前の暮らしや遊び、信仰や掟を回顧したことは、合意への方向性を導く作業として意味があった。特に昔話としてのウミガメは、「象徴」としてのウミガメとして共有された。生態に対して、人間の行動を自省的に重ね合わせることは、風土の観点から生じた倫理観の表れである。

「大変、海を愛している」(第5回会議)と語る地域住民にとって、海辺は散歩や釣り、漁の網を干したり、スポーツとしてのサーフィンといった生活の文脈の中にある。すなわち「身体化された海辺」である。このような身体的存在として蓄積された「身体配置」、「空間の履歴」を掘り起こす中で、自分自身と地域との関わりを再認識し、利害や課題をつなぎなおしていった。だからこそ、風景を眺められないような護岸の高さに対して、真っ先に懸念を示したのである(第5回会議)。それには、風土を主観や印象にとどめず、認識の共有へと向かわせた専門家の姿勢は大きい。立場の異なる参加者によく見られがちな「何が正しい意見なのか」を議論することなく、「昔の浜に戻したい」(第4回会議)という反省性に基づいた意見に集約していった。風土の共有が正統性の確保をもたらしたと言える。

今ある海岸は、荒廃した歴史の末に姿を現したものだという自らの覚りは、将来のあるべき護岸の姿を体系化しやすいだけでなく、風土性に立った公共性につながった。これは、海岸が荒廃する以前の風土と現在の風土との比較、自省作業であり、風土の認識作業といってよい。その上で、風土に依拠する将来的意味の共有を図ったのである。

### (2) 自己了解としての風土の捉え方と合意

一般に議論の場の参加者は、いささかも立場や持論を変えることはない<sup>(7)</sup>。参加者はそれぞれに利害を背負っているからである。この事例では議論を通じて、自分自身のあり方を問い直していくプロセスでもあった。これは和辻が強調した「自己了解」でもある。

議論を通じ、観光施設側を優先的に改修することになった結果に対しては、不満の声も一部にはあった(第6回会議)。しかし、参加者の一人が発話した、「とにかくこの合意というのは悲観的なものではないというのは理解した方が僕はいいと思うんですよ。その上で、だからまた次もつなげていかなければいけないと思うし、自分たちで。」(第6回会議)との集約に、すべてが納得する形になった。

近年の海岸の開発やサーフィン文化の導入などに対し、風土の要素を喪失することなく、むしろサーフィン文化や観光産業を受容する形で、海岸づくりの工程の許容範囲を決定していった。もちろん鴨川の場合、漁業という一つの文化が終わり、代わっ

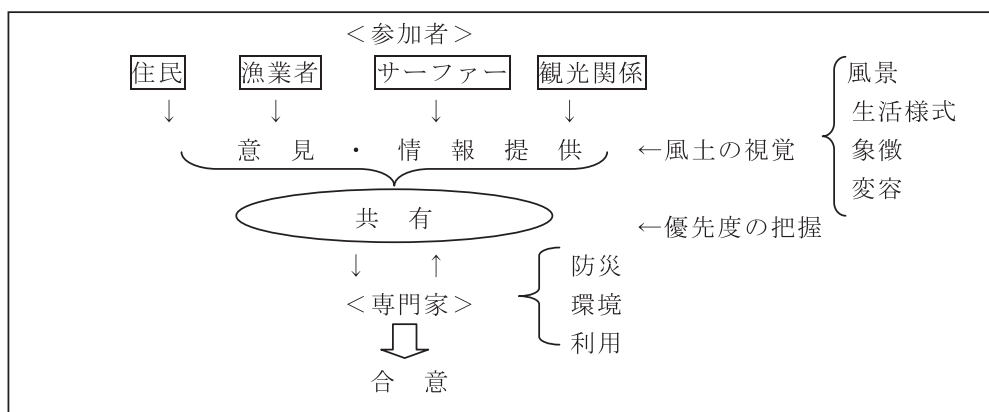
て新しく観光産業が生まれるのではない。人間との関わりで言えば、地域の生業が生き続けていることを把握することは、現代世代だけでなく将来世代にとっても欠かせないのである。したがって、現在の人間だけの生活世界ではないという自己了解のもと、「空間の履歴」が持つ方向性を逸脱していないかを議論し、合意していくことが求められる。

## 6. ローカルな会議と風土

この会議では、他の会議にありがちな複雑な対立構図はなく、参加者同士の言説が激しく対立した場面は少ない。その分、毎日、自然条件、護岸の条件、生物の条件に接している市民の意見は具体的であった。たとえば専門家が「技術論の話は全然する必要はなくて、もっと率直に、奇想天外な案でもいい」(第3回会議)と呼びかけたのに対し、市民からは「ホテルはその後ろに下がっていただく(筆者補足：陸側に下がる)などという夢物語ができればなあ」(第4回会議)との意見や、景色を見るために護岸の構造を「シーワールドさん(筆者補足：鴨川シーワールドの水族館)にある大水槽のような厚いアクリルのパネルでつくるとか……」(第5回会議)、「可動の護岸をつくって、危ないときだけせり出してくるというのはいかがでしょうか」(第5回会議)との案が出た。これらの意見は、一見、奇想天外に思えよう。しかし、これらの意見は、越波被害ではどのエリアに優先度を持たせ、あるいは諦め、どの風景を重んじるのかを参加者が認識したからこそ出てきた意見である。一度は案を提示された側の専門家も難色を示したものの「却下してしまうのはもったいなさ過ぎますね」(第5回会議)と応答している。このような議論に「防護」「環境」「利用」を重ね合わせた専門家の役割は大きい(図1)。

地域の再生とは、結局、豊かであった時代に、どのくらいまでなら戻せるのかを地域の人々自身が判断することである。変容する風土に寄り添って、地域を戻せるか否かを地域住民の皆が理解をしない限り、議論の場では具体像は出てこない。失ってしまっ

図1



(筆者作図)



たもの、すなわち変容した風土を遡るプロセスが、合意形成に不可欠の要素となる。

単に専門家や行政が提示する対策法を市民が選択するのではなく、議論し尽くした上で、結論として対策法を選ぶというプロセスは、多くの利害の調整を含む議論も全体像が見渡しやすく、将来像を豊かに提示してくれる効果を持った（表1）。まさにローカルな会議ゆえになされた豊かな議論である。

表 1

	発話	風土感覚／風土性	実施計画についての合意事項
防護	「砂が少なくなりっぱなし（浸食）」 「波を被ってしまう（越波）」	・背後地や森林などの水系全体を視野に入れる。	・護岸の嵩上げ
環境	「花がいっぱい咲いてほしい」 「ウミガメにとって最適な砂浜」	・植物、生物にとって最適な浜幅の検討	・100 ～ 200m 毎に海浜にアクセスできる階段工の設置
利用	「漁港の利便性の向上」 「サーファーの育成」 「釣りが好き」 「シーサイドを歩きたい」 「海が見たい」	・「身体化された海辺の記憶」の掘り起こし。 ・風景の確保	・鴨川漁港の除波堤に変更 ・人のスケールの確認

（筆者作表）

しかし政策課題について、県や国レベルで設置したような大規模な会議で議論した場合、出された意見の内容はローカルレベルの会議とは全く異なる。この場合、具体的な意見は出てこないだけでなく、自分（自分達の集団）の利益の私化の場となっているのである。参加者が現場や現状を見ずに議論している場合が多いからとも言えよう<sup>(8)</sup>。

合意形成とは、政治的な住民代表ではなく、そこで生活している人、生計を立てている人のエートスが理論的考察に活かされることが必要である。したがって、風土の共有に寄与出来るような議論の場の「規模の問題」は考慮されねばならない。

昨今、海岸行政においては、「親水の場づくり」といった耳障りの良い言葉が先行し、市場レベルでの大規模な計画・開発も多く見受けられる。しかし重層的な構造における基層のローカルレベルでこそ風土は再生・創造出来るということは繰り返し、述べておきたい。

## おわりに

この会議は、地域計画自身の中に風土を内在化させることを真の目的にしていたわけでない。また、地域固有の風土的な因子を探ることが目的であったわけでもない。

専門家が目指した「良い意味で折り合い」（第1回会議）を付けることは、利害の異なる参加者が、利害の「折り合い」を付けることではない。人と風土との関係に「折り合い」つけることを意味した。

合意形成プロセスにおいて風土とは、合意の動機づけと方向性を示し、地域計画の原理と実際の状況との整合に寄与する役割を持つと言える。風土に寄り添った合意の

志向は、荒廃した海辺の再生と、地域の関係性の再認識という2つの紐帯としての意義を持つ。その意味では、風土を軸にした地域づくりは、人間の行為を再検討していただけるようなローカルなところにこそ機能する。つまりローカルなところにこそ普遍性があり、未来へのまなざしもあるということが示されたのである。

合意形成プロセスは、その意味で自省的な行動様式であり、自己了解の過程なのである。

## ■注

- (1) 特に科学コミュニケーションにおいては、市民の無知を前提とし、正しい知識を伝えることが公衆の科学理解のためには不可欠だとする「欠如モデル」の考え方がある。
- (2) 合意形成を求められる場面では、時に不確実性の多い事象であったとしても、専門家は市民参加で出た結論と専門知に裏打ちされた「誤りなき決断」を迫られる場合が発生する。これを筆者は「専門家のジレンマ」と呼んでいる（嘉瀬井 2012）。
- (3) 本研究も「鴨川沿岸海岸づくり会議ホームページ」公開されている議事録を元に論じる。  
<http://www.city.kamogawa.chiba.jp/kaigan/kaigandukuri-index.htm>
- (4) 漁港を漁船と漁船以外のヨットやプレジャーボート等との利用調整をする為の総合施設。
- (5) 汀線より沖の方へ離れてほぼ海岸線に平行に設ける堤状の構造物のこと。
- (6) 波浪、沿岸流等によって海岸の土砂が持ち去られることによる汀線の後退、又は河川からの流出土砂の減少や「海に面する沿岸域の開発に伴う沿岸漂砂の遮断による汀線の後退。
- (7) 熟議デモクラシー論においては、こうした「選好の変容」は重要なよりどころとしている（田村 2004 他）。
- (8) たとえば 1996 年に原子力委員会が設置した『原子力政策円卓会議』では、招へいされた委員の大多数が学識を有する専門家であり、大都市圏の大学、研究所に勤務している研究者であった。それに対し、原子力発電所の立地地域の住民が委員として招へいされたのは、ごく少人数にとどまっていた。

## ■参考文献

- アンソニー・ギデンズ、(松尾精文、小幡正敏訳)、1993、『近代とはいかなる時代か — モダンニティの帰結』而立書房
- イーファー・トゥアン、(小野有五、阿部一共訳)、1992、『トポフィリア — 人間と環境』せりか書房
- オギュスタン・ベルク、1994、『風土としての地球』筑摩書房
- 嘉瀬井恵子、2012、「市民参加型会議に要請される知のデザイン」21 世紀社会デザイン研究学会『Social design review』(4)：57-66
- 亀山純生、2005、『環境倫理と風土 — 日本的自然観の現代化の視座』大月書店
- 鴨川市編さん委員会編、1991、『鴨川市史 — 通史編』鴨川市
- 桑子敏雄、1999、『環境の哲学 — 日本の思想を現代に活かす』講談社
- 高橋秀行、2000、『市民主体の環境政策・上下』公人社
- 田村哲樹、2004、「民主主義の新しい可能性 — 熟議民主主義の多元的深化に向かって」畑山敏夫・丸山仁編著『現代政治のパースペクティブ』第 7 章、法律文化社
- 松本三和夫、1998、『科学技術社会学の理論』木鐸社
- ユルゲン・ハーバーマス、(河上倫逸、M. フーブリヒト、平井俊彦訳)、1985、1986、1987、『コミュニケーション的行為の理論 — 上・中・下』未来社
- 和辻哲郎、1979、『風土 — 人間学的考察』岩波書店